

春先に咲く黄色い花たちの巻

撮り溜めしてあるスマホ写真をのぞいてみて「あれっ、春先に咲く花って黄色い花ばかりなんだなあ！」と気が付いて「だけど、どうして黄色い花ばかりなんだろ？」と疑問に思いました。そして、すぐにインターネット検索したところ、「早春から活動するアブやハエが黄色に敏感に反応するためであって、アブやハエたちをおびき寄せて受粉を促すためだ」ということが分かりました。「そうか、くっきりとした黄色を見せて私たちの気分を明るくしてくださる。さすがは我らが造物主」と一瞬神様に感謝したのですが、続いて「花たちが黄色く装うのは、私たち人間のためではない」という一言があるのを見て、「そうか、これも自然界を律する摂理の一環だったのだ！」と悟ることができました。

そこで、2020.05.15 発行の「花の言葉に耳寄せて Part 2 藤の花の巻」以来支援を受け続けている東芝出身で外国人ガイド業に転身している即興俳人の「高幡大馬王」殿に「春先に咲く花って黄色い花ばかりだってこと知ってたあ？」と尋ねてみると、「春先に咲く花というと思いつくのは蠟梅、菜の花、蒲公英、ミモザと言った花ですが、ほんと黄色い花ばかりですね」とのことでした。そこで、「花の言葉に耳寄せて Part 21」として「春先に咲く黄色い花たちの巻」を投稿する旨告げて、久方ぶりの投句支援をお願いしました。すると、高幡大馬王殿は、英語圏から来日する外国人が増えて多忙だというのに快諾して、ほんの 30 分間くらいのうちに投句してくれました。素晴らしいですね、打てば響くのこの対応。さすが、高幡大馬王殿の営むガイド業が外国人観光客に大もてだということが分かります。

高幡大馬王殿から送られてきたメールには、「もしやと思って、これまでのメール履歴をあさったところ、以前に花の言葉に耳寄せて Part 12 の蠟梅の巻と Part 15 の菜の花の巻に俳句とコメントをお送りしていることが分かりました」という前書きがありました。「なるほど東芝でも情報通信分野のエンジニアをされていただけあって情報管理をきちんとされているんだ」と感嘆するとともに、「外国人観光客に対する打てば響くの対応も、この情報管理があればこそなんだな」と改めて思いました。慌てて私も蠟梅(下左)と菜の花(下右)の写真を引っ張り出して「春先に咲く花は黄色い」ことを改めて確認しました。



そして、高幡大馬王殿は今回新たに「春先に咲く花って黄色い花」の代表として「蒲公英(たんぽぽ)」と「ミモザ(アカシア)」を取り上げて、それぞれについての俳句とコメントを送ってくれました。ほぼ、原文通り以下の通りご紹介しますので、新たに加わった春先に咲く黄色い花たち2種の花の言葉に耳寄せてみてください。

蒲公英(たんぽぽ)は春の季語です。「ギザギザの葉がライオンの歯に似ている」ところから dandelion (ダンデリオン) << dent de lion(仏) = tooth of lion(英) という仏単語発祥の英単語ができたようです。

- ・万国旗ひらひら 蒲公英ふわふわ (高幡大馬王)
蒲公英のふわふわな感じで世界平和を願いたいものです。
- ・獅子の歯より 出でし蒲公英 花円(まる)し (高幡大馬王)
英語名の語源は、「獅子の歯」ですが、花は円満そのものです。
とげとげした世界も、いつか平和(円満)になって欲しいものです。

ミモザ(アカシア)も春の季語です。

春先の黄色い花ミモザはアカシアの花でした。すぐに、「アカシアの雨が止むとき」(西田佐知子)を思い出しました。

♪アカシアの雨にうたれてこのまま死んでしまいたい～♪♪

角川歳時記には、次の作例が載っていました。

・すすり泣く やうな雨降り 花ミモザ (後藤比奈夫)

西田佐知子の唄とどっちが先に詠まれたのかわかりませんが。。

花の下で死んでしまいたい という歌詞で、次の和歌も思い出しました。

「願わくは 花の下にて春死なむ その如月の望月のころ」(西行)

せっかくなら、花びらが散る中で死にたいと考えるのも判るな一と思いました。

ミモザの花 そのものには、あまり印象・想いがありませんが、親父会の版画刷り師の友人が「ミモザという色」が大好きなので、娘にミモザと名付けたと言っていたことがとても印象に残っています。名前に違わず、とてもチャーミングなお嬢さんだったので、一句。

・「ミモザ」という 友人の娘(こ) 春ショール (高幡大馬王)

蒲公英(たんぽぽ)(下左)もミモザも、まぎれもなく「春先に咲く黄色い花」ですが、前出の蠟梅と菜の花も含めて「乱れ咲く姿が特に見事な春先に咲く黄色い花」と言えそうですね。



蒲公英(たんぽぽ)の花言葉は、「愛の神託」、「真心の愛」、「幸せ」、「別離」で、それぞれタンポポの特性や歴史的背景に基づいてつけられたようです。たんぽぽの原産地はヨーロッパで、日本には在来種と外来種の2種類があり、在来種は日本固有の品種で、外来種はセイヨウタンポポとアカミタンポポが主です。セイヨウタンポポは明治時代に日本に持ち込まれ、現在では広く分布していて、ニホンタンポポとの区別はしにくいようです。江戸時代には「鼓草(つづみぐさ)」と呼ばれていたのだそうです。タンポポの茎を水に入れて鼓のような形に反り返らせる子供の遊びがあり、その鼓をたたく「タン」「ポポ」という音がタンポポの語源になったのだとか。「蒲公英」という漢字は、中国で使われているたんぽぽの漢字表記で、中国での漢字表記をそのまま和名「たんぽぽ」に当てられたもので、「蒲公英(ホコウエイ)」というたんぽぽが開花する前に摘み取ったものを乾燥させた漢方薬があり、それがタンポポの漢字の由来とされているのだなどということまでわかりました。

一方のミモザは、マメ科オジギソウ属の植物の総称「ミモザ」で、マメ科アカシア属の植物の総称「アカシア」で植物学的には違った分類になるのですが、実際には「お辞儀をするかどうか」で見分けられるくらいなものようです。つまり、ミモザ(オジギソウ)はその名のとおりに、葉っぱに触れるとお辞儀をし

すが、アカシアは葉っぱに触れてもお辞儀をしないのだそうです。本来のミモザ(オジギソウ)の葉が、一部のアカシア属の植物の葉に似ていたため、ヨーロッパでアカシアが「ミモザアカシア」と呼ばれるようになり、後に「ミモザ」と略されるようになったようです。ミモザの一般的な花言葉は「感謝」と「友情」で、悪意の込められた花言葉はないようです。そんな好意的なところに由来したのか、「国際女性デー」に由来して、3月8日が「ミモザの日」となっていて、特にイタリアで、女性に感謝の気持ちを込めてミモザの花を贈る習慣が広まったことで知られるようになったのだそうです。ミモザがちょうど3月に美しい黄色い花を咲かせ、冬の終わりと春の訪れを告げる花であるため、国際女性デーのシンボルとして定着したわけですね。特定のパートナーだけでなく、母親、友人、同僚など大切な女性に贈られるそうです。3月8日と言えば今年は遅きに失していますが、来年の3月8日にはミモザの花を携えて日頃のご愛顧に感謝されてみては如何でしょうか。